

せったん

第130号 2010年10月25日

兵庫県保険医協会北摂・丹波支部
〒650-0024 神戸市中央区海岸通1-2-31
神戸フコク生命海岸通ビル5階
TEL078-393-1801 (代) FAX 078-393-1802

北摂・丹波支部



改定医療法対策
医療安全管理対策研修会
Part VII

外来でのヒヤリ・ハット対策

「失敗こそが改善のチャンス」

北摂・丹波支部は9月25日、7回目となる医療安全管理・院内感染対策研修会を開催し30人が参加した。「外来でのヒヤリ・ハット対策」をテーマに済生会兵庫病院感染管理認定看護師の小川麻由美氏が講演した。



講師は、医療では危険とエラーは避けられないものとして、①間違いを起こせない仕組みを作る、②間違いが起っても大事に至らない仕組みを作ること、「ハイリッヒの法則(1件の重大事故の背景に29の中程度の事故が発生しており、さらに300の小さな事故が起こっている)」をあげて解説した。そのために、インシデント(ヒヤリ・ハットと同義)・アクシデント

トリポートを、医療事故につながる潜在的な事故要因を把握し、事故要因に基づいて医療事故を防止するとともに発生した事故に対する

適切な対応を図ることに活用することを提示した。

さらに、レポート提出のポイントとして、「罰しない」「個人を責めない」「人事考課の対象にしない」「必ずフィードバックする」ことが重要とし、自院での活動も交えて実践的な取り組み方法について述べた。

最後に、医療を提供するうえで、医療の現場は危険と不確実性に満ちていることを認識するとともに、安全と患者本位の質を実現するために新しい医療のシステムを作っていく必要がある、「失敗こそが改善とチャンス」を肝に銘じることが強調された。

支部では、引き続き医療法ですべての医療機関に義務付けられている「医療安全管理対策・院内感染対策」研修会を年2回程度開催していく予定にしており、次回のテーマは「院内感染対策指針」の作成等を予定。

坂井新碁聖と坂井孝至先生ご夫妻との対談インタビューが実現



(左から) 森下順彦支部長、坂井秀至新碁聖、父親の孝至先生、母親の寿子さん

三田市出身で医師免許を持つ囲碁プロの坂井秀至(ひでゆき)さん(37歳)が、第35期碁聖戦で張栩(ちょうう)碁聖を3勝2敗で破り、初タイトルを獲得されました。

坂井新碁聖と、父親の坂井孝至(たかゆき)先生(三田市・坂井産婦人科、協会会員)、母親の寿子さんに、関西棋院

三田市支部長でもある森下順彦支部長がお話を伺いました。対談インタビューは森下支部長からの働きかけに応じていただき実現したものの。対談の内容は兵庫保険医新聞1634号(9/25)に掲載され、読者から「とてもよい記事でした」と好評を呼んでいます。

リニューアしました♪

【協会ホームページ・兵庫保険医新聞】

<http://www.hhk.jp/hyogo-hokeni-shinbun/>

【北摂・丹波支部】のページも是非ご覧ください!

<http://www.hhk.jp/sibu/hokusetsu/>



アンチエイジング医療の現状

～神戸大学美容外科のアンチエイジング医療への取り組み～

日時 11月13日(土)午後6時～8時
会場 三田市キッピーモール 6階多目的ホール (JR三田駅前)
講師 神戸大学大学院 医学研究科 形成外科学
神戸大学医学部附属病院 美容外科・形成外科准教授 一瀬 晃洋 先生
参加費 無料
※お問い合わせ・お申込みは、078-393-1801・3 (平井・黒木まで)

会員訪問
インタビュー①

「遠回り回りしたからこそ
今の自分がある」

三田市・武本内科診療所

武本 淑子 先生



武本淑子先生



武本淑子先生 (当時 27 歳)

支部幹事の武本淑子先生を訪問。医師を志された理由や支部活動のご感想などお聞きした。

—先生が医師を志されたきっかけを教えてください。

武本 淑子先生 (以下、武本) 医師を志したのは20代後半で遅かったです。私が23歳のとき、弟が難病に罹り、神戸大学附属病院に入院し、付き添いをしたのが始まりでした。

—それまでは違うお仕事をされていたのですか？

武本 父親の会社で経理の仕事をしていましたが、付き添いのため仕事を辞めて、病院に泊り込みました。夜はボンボンベットで寝て、鍋など持ち込んで自炊する生活、今では到底考えられないですが当時は許されましたね。約半年の間、多くの患者やその家族、またそこで働く若い看護師さん達と話をする機会を得ました。

弟がリハビリ病院に移り暇になった私はたまたま同病院の研究室で仕事をやる機会に恵まれました。学位取得の大学院医師のアシスタントとして、研究室で毎日試験管を振るう生活になりました。

—研究室での生活はいかがでしたか？

武本 常に医師たちに囲まれ研究会や医学会にも同行し可愛がってもらいました。よくプロパーさん(今のMR)に医師と勘違いされ困惑



トーマス・スターズル教授 (右)



研究室の同僚 (テクニシャン) 達



ガラス工芸体験 (2008年10月開催)

したものです。医師たちの勤勉さ、たわいない日常生活、物の捉え方、観察力の深さ等、非常に多くを教えてもらい学びました。一方、病院は医師中心ですべてが機能しているの、医師以外の病院で働く大勢の人たちの気持ちをその一人として実感することもできました。その経験が今も生きていると思います。実験にも慣れた頃、上司にアメリカだと重宝されるだろうとおだてられ、その気なってしまうたのです。

—アメリカの研究室でお仕事を？

武本 はい。アメリカ訪問中、ひょんなことからコロラド大学の肝移植で有名だったDr.Starzlの研究の生化学実験を担当する大役に抜擢されたのです。当然神戸大学の研究室で培った実験技術があったからこそでしょうね。ここでは日本からの留学医師も多く、直属の部下として働く私はみんなから羨望の眼差しで見られました。1年間と短い期間でしたが日本の比でない実験のボリュームやその経済力に圧倒させられました。

—その後、帰国されて医師に？

武本 帰国後、再び研究室に戻り実験生活を再開しましたがアシスタントとしては物足りなく、いっそ医師になろうかと。自信はありませんでしたがまわりの医師たちが応援してくれて、またまたその気になってしまいました。

無事医師となつて、研究に進もうと考えていたのですが、すでに母親になつていたので断念して臨床医の道を選びました。かつて弟が入院中、主治医が来てくれるのを一日中待っていたことが忘れられず、今度は患者の主治医となつてその経験が生きました。看護師さんや技師さんとも仲良く仕事ができるようになりました。開業して20年を迎えますが今もみんなから年賀状が届きます。

—医師になるまでにたくさんのご経験をされたのですね。

武本 現在もスタッフに恵まれ、患者さんにも恵まれているのは、振り返ってみると遠回りしたからこそではないだろうかと思えます。病氣と闘った弟、研究室の先生方、アメリカでのチャンスが私を医師に導いてくれたと感謝しています。

—今は支部の幹事としてもご尽力いただいています。支部活動のご感想をお聞かせください。

武本 毎月1回の幹事会は、歯科の先生方とも和やかな雰囲気、支部行事の企画や医療情勢など楽しみながら話し合っています。特に、支部活動では、ガラス工芸や吉本観劇バスツアー、バームクーヘン作り等のレクリエーションは、家族参加で楽しめて、すばらしいです。